

LaTeX による論文作成のガイド (第 7.1 版)

中 島 浩^{*1} 齊 藤 康 己^{†2}

このパンフレットは、情報処理学会論文誌（以後、論文誌と呼ぶ）に投稿する論文、並びに掲載が決定した論文の最終版を、日本語 LaTeX を用いて作成し提出するためのガイドである。このパンフレットでは、論文作成のためのスタイルファイルについて解説している。また、このパンフレット自体も論文と同じ方法で作成されているので、必要に応じてスタイルファイルとともに配布するソース・ファイルを参照されたい。

How to Typeset Your Papers in LaTeX (Version 7.1)

HIROSHI NAKASHIMA^{*1} and YASUKI SAITO^{†2}

This pamphlet is a guide to produce a draft to be submitted to IPSJ Journal and Transactions and the final camera-ready manuscript of a paper to appear in the Journal/Transactions, using Japanese LaTeX and special style files. Since the pamphlet itself is produced with the style files, it will help you to refer its source file which is distributed with the style files.

1. はじめに

情報処理学会では、論文誌を迅速かつ低コストで出版するために LaTeX による製版を採用している。この製版方式では、著者が作成した LaTeX ソースが基本的にはそのまま最終的な製版プロセスに使用される。したがって、多数の読者に親しまれてきた体裁を継承し、

読み易い論文誌を出版するためには、著者の方々の協力が不可欠である。

一方、著者にとってのメリットとしては、活字製版では避け難い製版時の誤りがなくなり、校正の手間が大幅に削減されることがあげられる。また専用のスタイルファイルと通常使われる LaTeX のコマンドを使えば、簡単に論文誌の体裁に則った出力が得られるので、日頃 LaTeX で文書を作成している多くの著者には無理なく受け入れられるものと期待している。さらに、投稿用のスタイルファイルも用意されており、最終版作成のための修正は最小限となるだけでなく、以前に比べて格段に読み易い草稿を得ることができる。これは自分の原稿をチェックする著者だけではなく、査読者にとっても大きなメリットである。

なお、論文誌スタイルには通常の LaTeX に追加されたコマンドがあり、その多くは論文製版に不可欠なものである。またスタイルファイルだけでは対処しきれない体裁上の注意事項もいくつかある。したがって、著者も含めて論文誌作成に関わる全ての人々の労力を軽減するためにも、原稿を作成する前にこのガイドを良く読んで規定を厳密に守っていただきたい。

2. LaTeX の実行環境

スタイルファイルは NTT の齊藤康己氏による jTeX (いわゆる NTT 版) と、アスキー社による日本語 T_EX (いわゆるアスキー版) のどちらにも対応しているので、著者の LaTeX 環境に関わらず同じスタイルファイルを使用できる^{*1}。

NTT 版およびアスキー版の LaTeX 2_ε について、以下のバージョンでの動作確認を行っている。

- NTT 版 = jTeX 1.6 + LaTeX 2_ε 1994/12/01 patch level 3
- アスキー版 = pTeX 3.141592 p3.1.4 + pLaTeX 2_ε 2004/08/10

いずれについても、ネイティブ・モードと LaTeX 2.09 互換モードのどちらでも使用することができる。また LaTeX 2.09 については、以下のバージョンでの動作確認を行っている。

- NTT 版 = jTeX 1.52 + LaTeX 2.09
- アスキー版 = T_EX 2.99-j1.7 + LaTeX 2.09

なお上記以前の版についても動作すると期待できるが、できれば新しい版を使って頂きたい。

^{†1} 京都大学

Kyoto University

^{*1} 現在、プリンストン高等研究所 (嘘です)

Presently with Institute for Advanced Study, Princeton (just joke)

^{†2} NTT 基礎研究所

NTT Basic Research Laboratories

^{*1} 実際の著者は情報処理学会 論文誌編集委員会である。

^{*1} 英文論文であればオリジナルの (すなわち非日本語の) LaTeX を使用することもできる。

3. スタイルファイルの使い方

3.1 一般的な注意事項

会議の予稿集などとは違い，論文誌の体裁には伝統的かつ「堅い」約束事が数多くある．そのためスタイルファイルも「堅い」ものとなっており， \LaTeX の特徴の一つであるカスタマイズ機能は大幅に制限される．例えば `\textheight` などのいわゆる style parameter を変更するのは当然やめていただきたい．どのようなカスタマイズが許されるのかを示すのは難しいが，一つの基準として「スタイルファイルを読んでみて大丈夫だと確信が持てる」こと以外はしないことを強く勧める．

なお，これらの変更やこのガイドで述べている「やめて欲しいこと」を行なっても，エラーになったりせず単に結果が変になることに注意していただきたい．

3.2 オプション・スタイル

`\documentclass`（または `\documentstyle`）の標準オプションとして，以下の 6 つのものが用意されている．

- | | | |
|-----|----------------|------------------------|
| (1) | landscape | オンライン出版用 ^{*1} |
| (2) | portrait | 紙出版用 |
| (3) | draft | 投稿用 |
| (4) | technote | テクニカルノート用 |
| (5) | preface | 序文用 |
| (6) | english | 英文用 |
| (7) | sigrecommended | 研究会推薦論文 |
| (8) | invited | 招待論文 |

これらのオプションは（意味があれば）任意の組合せで指定することができる．また論文誌への投稿／掲載以外の目的で使うことができるように，研究報告用の `techrep`（付録 A.1 参照）と（著者自身の web site 等に掲載するための）「著者版」を作成する `private` も用意されている．さらに後者では

`\copyrightnotice{ }`（著作権情報）

により，最初のページの左肩に学会著作権規定で定められた著作権に関する注意書を出力することもできる．

^{*1} このガイドのように A4 横長のオンライン出版用の製版を行なうオプションであり，デフォルトである．

`\usepackage` で^{*2}補助的なスタイルファイルを指定した場合には，製版用のファイル群に必ずスタイルファイルを含める．ただし， \LaTeX 2_ε の標準配布に含まれているもの（たとえば `graphicx`）については同封の必要はない．なおスタイルファイルによっては論文誌スタイルと矛盾するようなものもあるので，スタイルファイルの性格を良く理解して使用していただきたい．

3.3 表題などの記述

表題，著者名とその所属，および概要を前述のコマンドや環境により和文と英文の双方について定義した後，`\maketitle` によって出力する．なお投稿時には，表題と概要がそれぞれ別のページに出力され，著者名と所属は出力されない．

表題 `\title` および `\etitle` で定義した表題はセンタリングされる．文字数の多いものについては自動的な改行が行なわれないので，適宜 `\\` を挿入して改行する．その際には各行は左詰めで組版され，その後最も長い行を基準にしてセンタリングされる．なお和文表題は奇数ページのヘッダにも表示されるので，ヘッダに納まらないような長い表題の場合には

`\title[ヘッダ用表題]{表題}`

のように，ヘッダ用に短くしたものをオプション引数として指定する．

著者名と所属 各著者の所属を第一著者から順に `\affilabel` を用いてラベル（第 1 引数）を付けながら定義すると，脚注に `\footnote` や `\footnotetext` を付けて和文の所属（第 2 引数の `\\` より前）と英文の所属（`\\` より後）が出力される．なお，複数の著者が同じ所属である場合には，一度定義するだけで良い．また論文執筆時と発行時とでは所属が異なる場合には，`\paffilabel` を用いて新しい所属を定義する．新しい所属は脚注に `*1` や `*2` などをつけて出力される．著者名は `\author` と `\eauthor` で定義し，複数の著者は `\and` で区切る．また各著者名の直後に `\affilabel`（所属ラベル）を置いて（複数可）所属ラベル（`\affilabel` や `\paffilabel` で定義したもの）を参照し，対応する脚注参照記号を付加する．

なお，和文著者名は必ず姓と名を半角（ASCII）の空白で区切る．

概要 和文の概要は `abstract` 環境の中に，英文の概要は `eabstract` 環境の中に，それぞれ記述する．

3.4 見出し

節や小節の見出しには `\section`，`\subsection` といったコマンドを使用する．`\section` の見出しは 2 行を占め，他は 1 行に出力される．

^{*2} \LaTeX 2.09 の場合は `\documentstyle` のオプション引数で．

「定義」,「定理」などについては, `\newtheorem` で適宜環境を宣言し, その環境を用いて記述する. なお見出しは定理 1 などのように日本語の題と番号の組合せを想定している. 題と番号の間には微小な空白しか入らない. もし Theorem 1 のような英語と番号の組合せを用いる場合には, `\newtheorem*` によって環境を宣言すれば, 空白が挿入される.

3.5 文章の記述

行送り 学会誌は 2 段組を採用しており, 左右の段で行の基準線の位置が一致することを原則としている. また, 節見出しなど, 行の間隔を他よりたくさんとった方が読みやすい場所では, この原則を守るようにスタイルファイルが自動的にスペースを挿入する. したがって本文中では `\vspace` や `\vskip` を用いたスペースの調整を行なわないでいただきたい. なお `\begin{document}` の前にコマンド `\checkline` を挿入しておく, 本文の各行が持つべき基準線が印刷されるので, 行送りが正しいかどうかをチェックすることができる. ただしこのコマンドは原稿送付時には使用しないでいただきたい.

フォントサイズ このガイドの印刷結果からもわかるように, 論文誌スタイルでは様々な大きさのフォントが使われるが, これらは全てスタイルファイルが自動的にかつ注意深く選択したものである. したがって, 著者が自分でフォントサイズを変更する必要はなく, かつて行送りの原則を守る妨げにもなる. もし特定の箇所で行に多くの文字を入れたいなどの理由から小さいフォントを使用する場合には, `\small*` あるいは `\footnotesize*` という*が付いたコマンドを使用していただきたい (この二つ以外は禁止). これらは基準線間隔を変えずにフォントの大きさだけを変更するものである.

句読点 句点には全角の「。」, 読点には全角の「、」を用いる. ただし英文中や数式中で「.」や「,」を使う場合には, 半角文字を使う「.」や「,」は一切使わない.

全角文字と半角文字 全角文字と半角文字の両方にある文字は次のように使い分ける.

- (1) 括弧は全角の「(」と「)」を用いる. 但し, 英文の概要, 図表見出し, 書誌データでは半角の「(」と「)」を用いる.
- (2) 英数字, 空白, 記号類は半角文字を用いる. ただし, 句読点に関しては, 前項で述べたような例外がある.
- (3) カタカナは全角文字を用いる.
- (4) 引用符では開きと閉じを区別する. 開きには “ (“) を用い, 閉じには ” (”) を用いる.

Overfull と Underfull 製版時には overfull を起こさないことを原則としている. 従って, まず提出するソースが著者の環境で overfull を起こさないように, 文章を工夫するな

どの最善の努力を払っていただきたい. 但し, `flushleft` 環境, `\`, `\linebreak` などによる両端揃えをしない形での overfull を回避は, できるだけ避けていただきたい. また著者の環境では発生しない overfull が, 印刷時の環境では発生することもある. このような事態をできるだけ回避するために, 文中の長い数式や `\verb` を避ける, パラグラフの先頭付近では長い英単語を使用しない, などの注意を払っていただきたい.

また, `\` をパラグラフの終りで使用すると

```
Underfull \hbox (badness 10000) detected
```

の warning が発生し, 空行が挿入される. このような空行は見苦しく, また重要なエラー・メッセージを見逃す原因にもなるので, ソースを提出する時点では全て除去されているようにしていただきたい. 特に, 箇条書用環境の直前, `\item` の直前, 箇条書用環境の末尾などで `\` を使うと, 前述の warning が出力されることに注意していただきたい.

3.6 数式

- 本文中の数式

本文中の数式は `$` と `$`, `\(` と `\)`, あるいは `math` 環境のいずれで囲んでもよい. なお `\frac{a}{b}` (`\frac{a}{b}`) のように背が高い要素は見苦しくかつ行送りを乱すことにもなるので, 使用しないようにしていただきたい.

- 別組の数式

別組数式 (displayed math) については `$$` と `$$` は使用してはならない. すなわち `\[` と `\]` で囲むか, `displaymath`, `equation`, `eqnarray` のいずれかの環境を用いなければならない. これらは

$$\Delta_l = \sum_{i=l+1}^L \delta_{pi} \quad (1)$$

のように, センタリングではなく固定字下げで数式を出力し, かつ背が高い数式による行送りの乱れを吸収する機能がある.

- `eqnarray` 環境

互いに関連する別組の数式が 2 行以上連続して現れる場合には, 単に `\[` と `\]`, あるいは `\begin{equation}` と `\end{equation}` で囲った数式を書き並べるのではなく, `\begin{eqnarray}` と `\end{eqnarray}` を使って, 等号 (あるいは不等号) の位置で縦揃えを行なった方が読みやすい. なお `eqnarray` の中では改ページが行なわれないので, 行数が多く途中で改ページが起こって欲しい場合には, `\begin{eqnarray}[s]` のようにオプション

```
\begin{figure}[tb]
  < 図本体の指定 >
  \caption{< 和文見出し >}
  \ecaption{< 英文見出し >}
  \label{...}
\end{figure}\
```

図 1 1 段幅の図

Fig.1 Single column figure with caption
explicitly broken by `\\`.

[s] を指定すればよい。

● 数式のフォント

L^AT_EX が標準的にサポートしているもの以外の特殊な数式用フォントは、できるだけ使わないようにしていただきたい。どうしても使用しなければならない場合には、その旨申し出ていただくとともに、印刷工程に深く関与していただくこともあることに留意されたい。

3.7 図

1 段の幅におさまる図は、図 1 の形式で指定する。位置の指定に h は使わない。また、図の下に和文と英文の双方の見出しを、`\caption` と `\ecaption` で指定する。文字数が多い見出しは自動的に改行して最大幅の行を基準にセンタリングするが、見出しが 2 行になる場合には適宜 `\\` を挿入して改行したほうが良い結果となることがしばしばある（図 1 の英文見出しを参照）。

また紙面スペースの節約のために、1 つの `figure`（または `table`）環境の中に複数の図表を並べて表示したい場合には、図 2 と表 1 のように個々の図表と各々の `\caption`/`\ecaption` を `minipage` 環境に入れることで実現できる。なお図と表が混在する場合、`minipage` 環境の中で `\CaptionType{figure}` あるいは `\CaptionType{table}` を指定すれば、外側の環境が `figure` であっても `table` であっても指定された見出しが得られる。

2 段の幅にまたがる図は、図 3 の形式で指定する。位置の指定は t しか使えない。

図の中身では本文と違い、どのような大きさのフォントを使用しても構わない（図 3 参照）。また図の中身として、`encapsulate` された PostScript ファイル（いわゆる EPS ファイル）を読み込むこともできる。読み込みのためには、プリアンブルで

```
\usepackage{graphicx}
```

```
\begin{minipage}[t]{%
  {0.5\columnwidth}}
  \CaptionType{table}
  \caption{...}
  \ecaption{...}
  \label{...}
  \makebox[\textwidth][c]{%
  \begin{tabular}[t]{lcr}
  \hline\hline
  left&center&right\\ \hline
  L1&C1&R1\\
  L2&C2&R2\\ \hline
  \end{tabular}}
\end{minipage}
```

図 2 表 1 の中身

Fig.2 Contents of Table 1.

表 1 図 2 で作成した表
Table 1 A table built by Fig. 2.

left	center	right
L1	C1	R1
L2	C2	R2

を行った上で、`\includegraphics` コマンドを図を埋め込む箇所に置き、その引数にファイル名（など）を指定する。また L^AT_EX 2.09 の場合は、`epsf` を `\documentstyle` のオプションで指定し、`\epsfile` コマンドで図を埋め込む。

この節を注意深く見ると、図 1 や図 3 の最初の参照はゴシック体であるのに対し、2 回目以降では明朝体であるのに気づくだろう。この切替えは論文誌の伝統的体裁に基づくもので、図の参照を（「図`\ref{ラベル}`」ではなく）`\figref{ラベル}` を用いて行なえば自動的に成される。

3.8 表

表の罫線はなるべく少なくするのが、仕上がりをつっきりさせるコツである。罫線をつける場合には、一番上の罫線には二重線を使い、左右の端には縦の罫線をつけない（表 2）。表中のフォントサイズのデフォルトは `\small` である。

また、表の上に和文と英文の双方の見出しを、`\caption` と `\ecaption` で指定する。表の参照は `\tabref{ラベル}` を用いて行なう。

3.9 箇条書

論文誌では箇条書に関する形式を特に定めておらず、場合に応じて様々な様式が用いられている。スタイルファイルでは、L^AT_EX の箇条書用の環境である `enumerate`, `itemize`, `description` に 4 種類のファミリーを設け、状況に応じた使い分けができるようにしている。

- `enumerate`, `itemize`, `description`

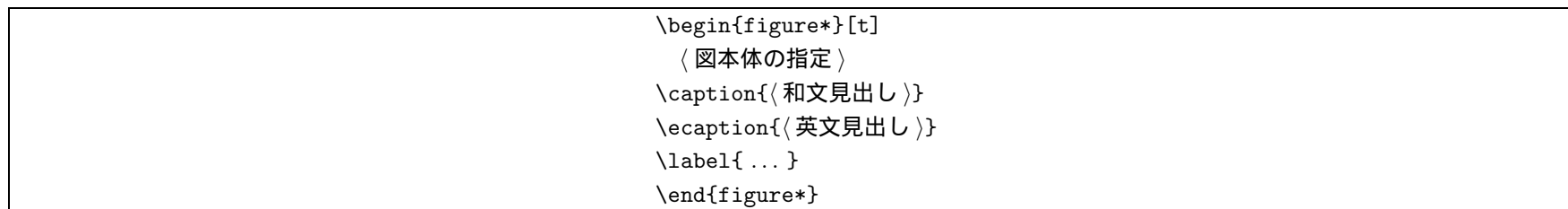


図 3 2 段幅の図
Fig. 3 Double column figure.

L^AT_EX の標準的なものと同じ．但しインデントーションは enumerate では全角 3 文字分，その他は全角 2 文字分である．また enumerate のラベルは，標準の

1. (a) i. A.

ではなく，

(1) (a) (i) (A)

のように全て括弧付きであり，数字などの前後に小さな空白が挿入される．

- enumerate*, itemize*, description*

enumerate などとほぼ同じだが，インデントーションは全角 1 文字分である．

- Enumerate, Itemize, Description

文章のインデントーションを行なわない．

- ENUMERATE, ITEMIZE, DESCRIPTION

文章のインデントーションを行わず，先頭行（ラベルがある行）を全角 1 文字分だけインデントする．

表 2 に示すようにこのパンフレットの各章／節に各々の環境の使用例があるので，適宜参

表 2 箇条書環境の使用箇所（表の例）

Table 2 Sections and sub-sections in which list-like environments are used (example of table).

	enumerate	itemize	description
type-1	3.5	—	—
type-2	—	3.9	3.5
type-3	—	3.6	3.3
type-4	3.2	2	—
type-1: enumerate 等 type-2: enumerate*等			
type-3: Enumerate 等 type-4: ENUMERATE 等			

照されたい．

3.10 左右の段の行揃え

文章の記述のところでも述べたように，論文誌では左右の段で行の位置をそろえる必要がある．ユーザが特別な高さのボックスを使ったために行の位置が乱れてしまうような場合には，その部分を `\begin{adjustvboxheight}` と `\end{adjustvboxheight}` で囲っていたきたい．この環境は中途半端な行送りを吸収するためのものである．例えば次の；

$$\sum_{i=0}^n i$$

は，以下のようにして出力したものである．

```

\begin{adjustvboxheight}
\begin{quote}
\fbbox{$\displaystyle\sum_{i=0}^n i$}
\end{quote}
\end{adjustvboxheight}

```

ただしこのようなものを本文中に挿入することを推奨しているわけではない．

3.11 脚 注

脚注は `\footnote` コマンドを使って書くと，ページ単位に^{*1}や^{*2}のような参照記号とともに脚注が生成される．なお，ページ内に複数の脚注がある場合，参照記号は L^AT_EX を 2

*1 脚注の例．
*2 二つめの脚注．

回実行しないと正しくならないことに注意されたい (L^AT_EX ブック¹⁾ の 156 ページ参照.)

また場合によっては、脚注をつけた位置と脚注本体とを別の段に置く方がよいこともある。この場合には、`\footnotemark` コマンドや `\footnotetext` コマンドを使って対処していただきたい。

3.12 参考文献の参照

本文中で参考文献を参照する場合には、参考文献番号が文中の単語として使われる場合と、そうでない参照とでは、使用する文字の大きさが異なる。前者は`\Cite`により参照し、後者は`\cite`により参照する。たとえば；

文献 `\Cite{total}` は `\LaTeX\cite{latex}` の総合的な解説書である。
と書く；

文献 2) は L^AT_EX¹⁾ の総合的な解説書である。
が得られる。

また、一つの `\Cite` あるいは `\cite` コマンドで三つ以上の文献を参照し、かつそれらの参照番号が連続している場合、3)–5) や「文献^{1),6)–8)}」のように、自動的に先頭と末尾の文献番号が ‘–’ (en-dash) で結合される。なお、非常に多数の文献を参照し、それら全てを `\Cite` や `\cite` で指定するのが面倒な場合は

`\multiCite{< 先頭文献のラベル>}{< 末尾文献のラベル>}`

`\multicite{< 先頭文献のラベル>}{< 末尾文献のラベル>}`

を用いて、3)–9) や「文献^{10)–11)}」のような結果を得ることもできる。

3.13 参考文献リスト

参考文献リストには、原則として本文中で引用した文献のみを列挙する。順序は参照順あるいは第一著者の苗字のアルファベット順とする。文献リストは `BiBTEX` と `ipsjunsrt.bst` (参照順) または `ipsjsort.bst` (アルファベット順) を用いて作り、`\bibliographystyle` と `\bibliography` コマンドにより読み込むことを原則とする^{*1}。これらを用いれば、規定の体裁にあったものができるので、できるだけ利用していただきたい。なおこのガイドの参考文献は、`bibsample.bib` を文献スタイル `ipsjunsrt` で処理した結果であるので、両者を適宜参照されたい。また製版用のファイル群には `.bib` ファイルではなく `.bbl` ファイルを必ず含めることに注意されたい。

一方、何らかの理由で `thebibliography` 環境で文献リストを「手作り」しなければならない場合は、このガイドの参考文献リストを注意深く見て、そのスタイルにしたがっていただきたい。

3.14 謝辞、付録

謝辞がある場合には、参考文献リストの直前に置き、`acknowledgment` 環境の中に入れる。この環境の中身は投稿時には出力されない。

付録がある場合には、参考文献リストの直後にコマンド `\appendix` に引き続いて書く。なお付録では、`\section` コマンドが A.1, A.2 などの見出しを生成する。また付録全体に見出しをつける場合には、`\appendix[< 見出し>]` のように見出しをオプション引数として与える。

4. おわりに

論文誌の L^AT_EX 化は...

謝辞 論文誌の L^AT_EX 化に御協力いただいた三美印刷 (株) (株) ウルス、ならびに試行のためのボランティアをお願いした著者の皆様に、謹んで感謝の意を表する。

参 考 文 献

- 1) Lamport, L.: *A Document Preparation System L^AT_EX User's Guide & Reference Manual*, Addison Wesley, Reading, Massachusetts (1986). (Cooke, E., et al. 訳: 文書処理システム L^AT_EX, アスキー出版局 (1990)).
- 2) 伊藤和人: L^AT_EX トータルガイド, 秀和システムトレーニング (1991).
- 3) 桜井貴文: 直観主義論理と型理論, 情報処理, Vol.30, No.6, pp.626–634 (1989).
- 4) 野口健一郎, 大谷 真: OSIの実現とその課題, 情報処理, Vol.31, No.9, pp.1235–1244 (1990).
- 5) Itoh, S. and Goto, N.: An Adaptive Noiseless Coding for Sources with Big Alphabet Size, *Trans. IEICE*, Vol.E74, No.9, pp.2495–2503 (1991).
- 6) 田中正次, 村松 茂, 山下 茂: 9 段数 7 次陽的 Runge-Kutta 法の最適化について, 情報処理学会論文誌, Vol.33, No.12, pp.1512–1526 (1992).
- 7) Abrahamson, K., Dadoun, N., Kirkpatrick, D.G. and Przytycka, T.: A Simple Parallel Tree Contraction Algorithm, *J. Algorithms*, Vol.10, No.2, pp.287–302 (1989).
- 8) 田中正次ほか: 9 段数 7 次陽的 Runge-Kutta 法の次数条件式の解について, 情報処理学会論文誌, Vol.33, No.12, pp.1506–1511 (1992).
- 9) Chang, C.L. and Lee, R. C.T.: *Symbolic Logic and Mechanical Theorem Proving*, Academic Press, New York (1973). (長尾真, 辻井潤一訳: 計算機による定理の自動

^{*1} このガイドはファイルを一つにするために `thebibliography` 環境を用いているが、その中身は `BiBTEX` で作成したものである。また、この footnote は左カラムにマークがあるのに footnote 自体は右カラムに現われている。これは簡単なトリックで実現できる。ソースファイル参照。

証明, 日本コンピュータ協会 (1983)) .

- 10) 新世代コンピュータ技術開発機構: 第五世代コンピュータプロジェクトの概要, FGCS'92
にて配布 (1992).
- 11) 情報処理学会論文誌編集委員会: \LaTeX による論文作成のガイド (第 1 版) (1995).
(論文著者に配布) .

付 録

A.1 研究報告の作成

研究報告が完全オンライン化されたことに伴い、学会のフォーマットに準拠した掲載版 PDF 作成が著者の責務となった。この掲載版は `\documentclass` のオプションに `techrep` を指定することで簡単に作成できる。ただし各ページ右下隅の著作権表示部分に印字される西暦年を、研究報告掲載日に応じてカウンタ年数 (または `year`) に `\setcounter` を用いて設定する必要があることに注意されたい^{*1}。

^{*1} プリアンブルでカウンタが設定されていない場合には警告メッセージが表示され、 \LaTeX の実行日に基づく値が設定される。